

5歳児(すみれ組)がモデルに…。

令和3年度がスタートして5ヶ月。雨の多かった夏から少しずつ秋の気配を感じます。子ども達の遊びもお盆を過ぎたころから少しずつ変化が見られます。色水遊びやぬたくり、泥んこやじゃぶじゃぶ池、虫取りなど。夏の遊びを十分に楽しんだ子ども達は、大人が何も言わないのに、ルールのある遊び(鬼ごっこなど)や自らの意思で挑戦する遊びへと変わっていきます。その中心となり牽引しているのは、5歳児(すみれ組)です。子どもが主体の教育保育に変わってから、この5歳児のすることなすことが、縦割りの友達関係にとっても良い影響と刺激を与えることを私達は見てきました。谷頭こども園の子ども達も遊びの伝承が見られ、5歳児がモデル(お手本)になっています。特に鬼ごっこは谷頭独特です。子ども達曰く、「虫鬼ごっこ」だそうです。ルールも鬼と子役の設定も子ども達の発想からきています。また、フリスビーを使った遊びも標的物を変えたり、障害物のポイントを工夫するなど5歳児(すみれ組)のオリジナルにあふれ、自然に3.4歳児(ひまわり、ゆり組)にモデルを示しています。

毎日の子ども達の遊びは、ドキュメンテーションに書かれています。当園のドキュメンテーションは、子ども一人一人の遊びの中の『学び』を見つけ出すことを課しています。私はドキュメンテーションは個人記録だと思っています。一人の遊びの中の学びに焦点を当てて子どもを見ていくとその子どもの発想や工夫、試行錯誤の果ての成功や失敗が見えてきます。私達保育者はその貴重な場面に立ち会うことができます。「子どもの発想はすごい!」「失敗したけど明日はどうするのかな?」「あんな言葉を知っているんだ!」など…。見守りの中で見つけた、ひとりひとりの学びは、とても愛おしく感動させられます。そんな時、私達はこの仕事を選んで良かったと心の底から思えてなりません。

是非、日々のドキュメンテーションをご覧ください。

異年齢で過ごすこと＝『多様性』の尊重

東京2020オリンピック・パラリンピックが終わりました。どちらもメダルラッシュで各選手の活躍に感動しましたね。同時に『多様性』という言葉が、前面に出た大会でした。地域や国、人種や宗教、身体的差異などの壁を越えることはもちろん男女の性差を含めた『ジェンダーレス』の言葉も印象に残る大会になりました。『多様性を認め合う』とは、互いの違いを尊重し合って社会を発展させていこう『人間は色々あって良いじゃないか』ということです。

保育の現場では『ジェンダーレス』の考え方は私が若い時には、無かったに等しいです。保育士は保母と呼ばれ女性に限定された時代。看護婦さんも同じでした。現代では、男の子は青、女の子は赤と言う固定された色の概念も無くなっています。ランドセルの色がカラフルになったのも男女問わず選択の幅が広がるからだそうです。

2020年から段階的に施行されている新学習指導要領では子ども達の「生きる力」を育むことに重点が置かれています。その中に多様性の理解や主体性、問題解決能力の育成が強調されています。これは、認定こども園教育保育要領も同じことが示されています。だから、当園は、30年度より3歳以上児クラスは、『縦割りクラス編成』なのです。縦割りクラスで期待されることは下記のようなことです。

- ①子どもの主体性や自発的な遊びが展開しやすい
(年上の友達の高度な遊びの影響と刺激を受けやすい)
- ②多様性の容認 (発達の特徴を含めたいろいろな友達がいることや人の違いを受け入れる力を養いやすい)
- ③誰でもリーダーになれる
(同年齢の中では難しくて年下の友達の中ではリーダーになれる機会が増え、自信に繋がり自尊感情が上がりやすい)
- ④一人っ子も真ん中っ子も末っ子もクラスの中では、お兄ちゃんお姉ちゃんになれる。
- ⑤年上の友達に助けられたり、いたわってもらった経験から立場が変わった時に、年下の友達に同じように接することができる。
- ⑥遊びの伝承ができる。(大人を介さずとも遊びや技術の伝承や継承ができる。年上の子どもがモデルになる)

世界中で、自分と違う考え方や宗教、人種などを排除する動きが広がっています。自分のまわりに同じような思想の仲間だけが集まり、その他から距離を置く考え方は、『多様性』の尊重からしても狭い生き方だと思います。

これからの人生を進んでいく子ども達の「生きる力」の最も根本となるものが培われる、0歳から6歳のこども園時代。クラスの中にいろいろな友達がいるから一緒に育ち互いの違いに気づき、それを認め尊重できる子どもになって欲しくて、子ども主体の教育保育を進めて行きます。